

和書門

					和書門
			一七	八	
			二六	九	
四	五	四	九	二	
冊	架	函	號	類	

庫文閣内					
					和書
			八七	九	
			二四	五	
二	一	二	三	二	
函					
架	冊	號	類		

内閣文庫		
番號	和	18769
冊數	45 (32)	
函號	211	305

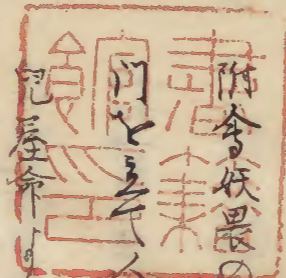
和書門



長岡為磨といふものなり

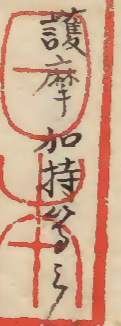
無田の初友初か

惟三つの人

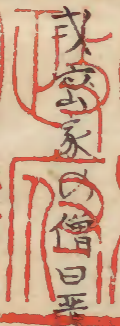


附奉儀農の事とありて無信と欺き自隱者と号して奉祀とす一箇の
門と云ふ人の崇敬と信との多りかれそす子どりのかみ神系と云ふ
記奉命より惟三為磨と信し初たり是實小正憚りまゝと云ふ記のありて

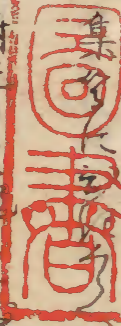
とて佛者師才血脈乃お侍わたり其師の始て十八神道



護摩加持の記密咬雲家の糟粕と秘し扱一箇の天塚盜食の記のあり



或雲家の僧曰麗氣記古書にてせし行の記も弘法の筆を差して性悪



集の文字扱一是ハ麗氣灌頂の書等と本一後入大師に

附托し他の記ありとあり予彼麗氣灌頂の切紙と云ふ事とありたり
ゆゑ今卜部兼俱以來神道秘傳と云ふものあり彼灌頂のれ意と
ありて

作らるるものありと云ふは密家の言なり信じて其経議軌合せ
建の事あれは彼家やしては信ありと云ふは我國の事なりとて意味と云ふ
たふ新巻一ト郊家と非代家のわけを云ふと信の事なり
なり世々ハ密家の書と云ふ事なり信ありと云ふは密家の事なり
諸家の秘書と云ふもの考て帝紀實録と証しては信ありと云ふは我國の
故と云ふ

漢嵐拾葉

正和二年 壬子六月山門興圓所^述 壬子元年也 誤也

信景梅苗日能野熱日吉等皆有大神宮一休之說是密家依金胎西部習合之傳而先
為神佛一休習合之說後為太神宮方某社一休習合之証太神宮國家宗廟故以此云己之

所奉祀祠禪殺以僥倖天下之崇敬是浮屠巫覡之奸詐蝶躞神明者也

大宮和主真子十禪師宗廟神二宮社神其他社八王子各板神也云々

信景曰十禪師云々本僧官也然以十方衆生法喜禪悅食之語而附合之或以天孫受十
代之禪而奉命合古鎮座記隨之共忘其故為註誤者

山王七重習

- 一垂迹山王
- 二本地山王
- 三觀心山王
- 四無作山王
- 五三密山王

六光初不知山王 七如影隨形山王 畧其記

是等皆以法華之旨所建

大宮不入信形

按是始准伊勢所為歟

天照太神者自性法身素多益鳥尊者無明鍊塙者法界塙婆也閉岩戶者無明法義也
大刀之神者定惠之法也庭火者諸方便教也云々

按卜部家氏等以大神隱窟者為理說日我心原明也以邪念悖此之者素多益鳥尊為

惡目神入窟也諸神集會設燎奏樂者復明之美午カ雄開岩戶者以勇去闇也

一時也者開邪念而復明理本原意也等云々是倣浮屠之說變詞者而不知紀本義可亦歎哉

山王使者云之花嚴日神擬極擬王又云山母山神王云々山王秘夾云無勤寺智信說山王者釋尊應迹

以申為卒迹天神無氏示申為神地祇有氏示氏為祇云々

梅使者浮屠之說也秘決解神字亦附會申屈伸之申而不大歲所舍名浮屠多以私意解

文字故此集第一山王字義謂豎橫三點者奉合不疑不橫非三之觀法為權現托宣

熱田明神云蓬萊宮者熱田社是也揚貴妃者今熱田明神是也此社後有五輪

捨婆銘釋如種子故字此捨婆揚貴妃墳墓也

此說至拙故然至近也彼捨婆社後是依浮屠之說所建也

熱田明神者金剛界大日也故以五智習本地或以真言三部經為本地宝劔為神体

皆是金剛界右門表示也

是以藏劔習合密說者也

蓬萊宮者不壞金剛智体也法華宗旨本地三身指久遠壽量習不老不死云々

是以有蓬萊之妄說又仍并附會者也

熊野權現云々熊野胎藏權現金密金剛權現等云々

密宗以我神祠充兩部以習合其後男女交合亦習合兩部恐不傳是

立川那義所紀也

熊野參詣路次道言ミヤコト男ヲヲト名メイト名メ居ラハヒツフギト名メ法師ハハリト名メ

是效伊勢奇宮忌詞所設夫熊野事為佛事何凡僧尼忌詞意將准神宮所造者歟

天照太神每日法樂如何為山家大師每日神法明法樂法云常在靈就鳥山及餘諸住所我此亦總天人常充滿云々

鳴呼淳唐執所習捨我國故以用書謂余神ハ冬ハ胡神ハ溪嵐一書素小羅不足勞齒牙以古書入誤信之宜知其說矣

○ 按神宮雜事記景行天皇廿八年九月十一日五百野皇女供奉始也天武天白王白鳳四年九月十一日多基子內親王御杖代之始也是依大友皇子之亡勅賈

之典也先親錄多基子之上錄內親王十六人其內度會ヲコトガ小事之宮子

○ 非皇女稱內親王雖言宣下而不見正史歟
和列之海ふれり法苑社ありとや花去はのの葉ハ渡と襍記より

○ 大暹有稱宜大夫稱梅是祠官拜五位者歟後世諸社神人自稱某大夫代呼同稱者近世僧上而若俗稱某九衛某兵衛等歟習俗不可

變可歎哉

○ 卜部兼俱明應三年十月の中臣坂聽言一巻と梅とある祇園の牛以天白王の所和天白王負觀中天下疫疠流行と兼俱平代の所日良摩勅とありてそのの男女と兼ひて月七日とあり神意とあり

春と幸と記して藤原氏の土邦と云ふ所の説あり今國々
ふひや邦と云ふと云ふは漢紀ありん天慶以後而ふ初と
まゝの古事ありたり

○ 崔鴻前秦録符堅滅燕趙之後自長安至干諸州皆夾路樹槐柳二十
里二十里一旅行者取給於塗工高資販於道云々

是我々の善者なり樹の夾樹と書し信ありと云ふん

○ 為惡而畏人知惡中猶有善路為善而急人知善處即是惡根還初道人
業根譚

竹影掃階塵不動月輪穿沼水無痕

瓶賬敗砌兔走荒臺盡是當年歌舞之地露冷黃花烟迷衰草悉屬何時

爭戰之場

妙尔里之河也一其二三抄と

○ 勢田正縁記和銅元年九月勅造新殿遣阿倍朝臣多治比真人池守於勢田
宮別建祠祭之

按是今の八剣神社なり阿倍朝臣名と闕せり續日本記と考ふ名ハ
宿奈磨宮なり

○ 源親氏主称世良田舍弟恭親主号松平一譜云後花園帝御宇某大臣
配流三河國尋勅免上京時撰供奉之志恭親主依徳川源氏供奉依之
被称徳川云々然自親氏主至清康主皆称世良田

神君永祿九年十二月任参河守近衛嗣内書記徳川三河守是始歟

○ 李卓吾焚書曰經史一物也史而不經則為檄文矣何以垂戒鑑乎經而不史則為說日語矣何以彰事實乎

富莫富於常知足貴莫貴於能脫俗スル貧莫貧於無見識賤莫賤於無骨力身無一賢曰窮明來四方リ達百歲榮華曰天萬也永類曰壽

○ 日本後記し西七月之畧也

○ 承和七年十二月十九日帝七當作八九日類聚國史作十九日續日本記十

○ 承和八年十二月丙寅朔甲申修日本後記訛奏御云云

一卷桓武天皇

延曆十二年十月辛巳勅明經之徒不可習吳音ヲ及殺聲ヲ誦讀致訛

謬ヲ孰ハ習ハ漢音ノ

十四年四月勅禁元下百姓將田宅園地賣買與寺事

五月右京人上毛野ウツマノ兄國エツニカクメ也流土仇因ス以自稱諸天ハ言惑衆

二卷 十五年十月勅禁祭北辰

三卷 十七年十月官符林示ス西京畿内夜祭歌舞

五卷 二十一年五月廢相模國足柄路開管ヲ途以リ富土燒碎ヲ石室ヲ道也

六卷 二十五年二月官符應五畿七道諸國轉讀金剛般若經云云道ヲ使

國分僧春秋二十月別七日存心奉讀之是為崇道天皇也

七卷 平城天皇延曆二十五年四月辛巳即位於大極殿改元大同非禮也君即位踰年而後改元者緣臣子之心不忍二年而有二君也

九月壬子遣使封在右京及山崎津難波津酒家雍瓦以水旱成災穀米騰

九月壬子遣使封在右京及山崎津難波津酒家雍瓦以水旱成災穀米騰

糴也

大同二年四月罷參議^号置觀察使近衛府者為左近衛中衛府者為右近衛

藤原内膳九近大將上
田村磨右近大將

是九右大將也云云十月丙辰勅令三位以上並著淺紫

梅續日本記文武天皇大室元年三月服制一位者皆黑紫二位以下三位已上者

アケ合カキ
赤紫云々

九卷嵯峨天皇大同四年五月癸酉聽五位以上通用白木笏

十卷弘仁三年三月林示曾入尼寺ニ入僧寺

十一卷弘仁四年此年天下吳竹實如麥多其後枯盡

十二卷六年四月幸近江國滋賀縣^カ一過宗福寺^カ大僧都永忠^カ自煎茶奉

御云云

十三卷八年四月於大學寮使習漢語

十四卷辛巳詔曰改錢文曰富壽神室

十五卷十二年四月官符禁所損水辺山林事云々大河之源其山鬱鬱然小河之

流其岳童焉爰知流之細大隨山而生夫山出雲雨河潤九里山童毛冬溪流涸

乾百姓憚遠貪近川上林任意伐採至有旱年溉之苗焦動道損害職比之由

也云云禁所損路也樹木事道邊之木夏垂蔭為休息處秋結實民得食云々

十六卷六月庚辰^上尾張國筑田神奉授從四位下

十七卷三月割越前國江沼加賀二郡為加賀國

十八卷二年十二月今成浦島子飯御雄畧天皇御宇入海至今三百四十八

年也云々

二十卷 八年今年奉勅滋野朝臣貞主等諸儒撰集古今文書以類相從凡百
一千卷名秘府略

十年二月皇帝遷御西院乙酉皇帝於淳和院讓位於皇太子

按平城嵯峨号以其遷御之地名淳和為離宮共非謚例

抄より小倉の祭と抄より小倉を更としれと身より法記より多し又

春秋二仲一七日佛事八彼岸寺の権雲欽金剛般若波羅密多と讀波羅密と

到彼岸と讀よれこれ小倉にて死す歟

尾張津島

牛頭天王祠社傳欽明天皇元年鎮座不見日本記
又牛頭天王名此時未有歟

改曆雜事記聖武帝天平五年吉備飯朝於播州逢牛頭天王廣安社記

及岑相記說同之

按續日本記十二吉備飯朝天平七年乙亥四月也紀不謂牛頭天王事

津島社記嵯峨帝再建

日本後記類聚國史等無建牛頭天王祠事當時天下疫多然亦無祭牛頭

天王說

清和帝貞觀十一年以津島天王勸請山城國祇園社

三代實錄無此說十二社注式及改曆雜事記岑相記古證文皆以播州飾

磨郡廣峯牛頭天王為京師祇園本祠ミヤヤロ凡國史無牛頭天王事然則中

世以後所祭欽東鑑見尾州津島社名

○ 無量壽經ニ普觀の僧唐僧鎧胡譯セリ下卷造惡のよと後父子兄弟室家

夫婦都無義理不順法度相欺惑佞論不忠巧言諛媚嫉賢謗善主上不明任用臣

下自在機偽多端等しは當時魏の世のときとてしりし似たり胡佛の國より
君臣の禮義とて善と名け何と此説ありん又云佛所遊履國邑丘聚聚非
不蒙化天下和順日月清明風雨以時災疠不起國豐民安兵戈無用宗德興
仁務修禮讓と名聖人遺化存神の徳と假りていふ今佛説し似たり

三川椽投山神宮寺徳川家河位牌

親氏云 康安元年辛丑四月廿日卒去

泰親云 永和三年乙巳九月廿日卒去

右年号可疑康安元年ハ尊氏薨後四年多し永和も義満の代かり

家忠日記増補追加發題日親氏主康正二年四月廿日卒泰親主其年九月三日

卒是実誤ナリ

信光公 長亨二年七月二十七日卒去

信光ハ泰親の沖子とあれりも宮ハ親氏の男なり康安元年より長亨二年

まで百八十年少父山荒去の後これ程をいハ不審然泰親の由ありて永和

三年ハ長亨二年ニ百十二年カケりたる泰親少年の年ハ信光生れ給ふ

可し少年百二十歳カケりたる也其の由あり可敷且少系圖より

永亨元年ハ三列ハ親氏入内とあり又一説義教將軍協金の由氏と遊て

後小雜田の末と搜るれ有親親氏の由父子徳川の由とあり少抄に後房ハ永亨

十年秋康安元年ハ少抄より七十九年永亨二年ハ少抄より七十九年

變てて親氏と後之皇統の由ありの事とあり元和八年二月ハ之保

朝の書に親氏應永元年逝去泰親永亨二年ハ卒りたりとあり少抄より

江戸の城は文治年中上杉右衛門尉憲忠の長子太田持資入道道灌築
おとよ一天皇のまはハキキ右衛門尉景政居城あり一景政は陳氏小唐
相列小甲原より上りて身川村より入つて江戸の城を築くに
景政の甥は遠山丹波守ありて田原守ありてと

神名くしと一鳥を攻て神のまはりりるそと長土の神あり
城と神の殿閣と修せり一宮よりせの信基也の信

○ 後花園院御宇神璽南方より御座ありて委しく上月記に云たり
康二年三月間信長系上月九日近江中村渡志守平人吉兼
入四年長祿元年三月二月信長と彰一神璽と修りりる○八月
神璽は御座ありて是より神璽に希や多ありて神璽は諸

及び信長太平記と述せり一神璽と云たり

○ 或人曰高野山法流より一叙と極法を撰武勇と働くと武を云ると
か人せにん身より一まれりてなる信長とて人おぼしむと云
人とて一家の功名も自れおと一か人信長とて人おぼしむと云
ゆり一極法の働より人信長とて一國を治天下とて人自れおと
一人と教一功と主人と功とて一信長の人とて人信長とて一
城と攻人とて一信長とて一信長とて一信長とて一信長とて一
少事大勇なりて一信長とて一信長とて一信長とて一信長とて一

○ 山王神階大宮元慶四年二宮承永二年聖太子八王子客人十禅師三宮建長二年
五位五位俱五位

○ 下御霊八所内分て神泉花より自觀五年五月和州神霊事

左中將藤原基經 等監事 講師 八惠暹律師 云云
權中將藤原常行

桓武天皇延暦二年癸亥五月八日幡北直曰我名護國尋驗威力神通大自在王

菩薩

嗚呼軌不軌何ぞ大邦自今と謂しんや甚哉浮屠誣神欺人

三寶荒神

神 素盞鳥尊
武 素盞鳥尊 速 素盞鳥尊

ト氏々附會少世三寶荒神ハ浮屠の私チ子密家有説少れと誰とハ谷者集

小見ハ拙哉ト氏

直滿

井伊信濃守 直親 肥後守 直政 兵部少輔

藤原の姓トて井伊谷介の裔孫なり

伊勢氏北條先祖

正度

平姓從四位下 越前守

季衡

右京亮

盛光

右京亮

成行

右兵衛尉

成盛

恒平

恒平三代伊勢守俊繼始子伊勢氏

老問伊勢備中守貞藤子伊勢新九郎長氏

一説

鎮守府將軍平維衡老問伊勢守氏貞之孫駿河守照康二男新九郎長氏

一説

小松資成也老問伊勢肥前守成盛末孫伊勢新九郎成盛時後改北條新九郎長氏

或云ハ伊勢新九郎ハ山城守成盛の孫也云ハ山城守成盛の孫也云ハ山城守成盛の孫也云

成盛の孫也云ハ山城守成盛の孫也云ハ山城守成盛の孫也云ハ山城守成盛の孫也云

在位の帝は法をまつまふとこれほひなり思ふやと御し〜ハむの
御なり天より兼代ゆ受戒のりゆ佛をよ出悪石義のりこと
我方よりゆ佛法をえりゆとれ〜行をやり善人なりとのりる所アハ
君と裁まると賊子やれりも仏法興隆の社とゆ〜聖武の周主存謙の徳礼
の始の愚弱かり教もやると大佛建立より三十三夜願礼の始とて佛
菩薩の化現やとゆ〜とて〜ありゆ〜

○ 元弘三年^{正月}近江国馬場^{シバ}宿米山の蘇一向堂にて歿死自殺の士四百三十余人
其中百八十九人此石法号馬場^{シバ}八葉山蓮花寺の過去帳ふらんゆ

○ 何れも何れと思へるれ〜ゆ〜にまゝの麻の〜と〜

○ 西三條のゆゆとらん人ばかりとこれ〜ゆ〜のなまを〜ゆ〜ゆ〜

てあやゆりか〜ゆ〜



五十一

